

巻頭言

宮沢賢治の遊動(協同)労働に学ぶ

上平 泰博 (協同総合研究所前専務理事)

昼間のエッセンシャルワークを終えて保育士資格を得るため夜間専門学校へと通う若者。学校は居場所を兼ねるが、コロナ禍の今年度は「Zoom」スクールとなった。だが学びのモチベーションは意外にも高い。保育には唯一の「正解」はないので、選択と決断を迫られ試行錯誤を繰り返し、実践経験を積み重ね工夫しては反芻する。これしかスキル獲得の方法はないのだと肌身に感じるのだろう。

学校にも役割があるとすれば、子どもの琴線と肌感覚に触れる保育士の喜びは、ときとして揺らぎ懊悩するから、問いを立てる探求的な思考を鍛えることが大切となる。当事者主体で対話的手法を用意すれば充足できよう。「教える」側は精錬した中身を提供し、ファシリテーターに徹し、つまり「教えるの」スタイルを脱ぎ捨てたら、喧々諤々と議論し意見表明がはじめる。

今年はコアとなる素材をどうしようか悩んだ末に福岡伸一と宮沢賢治に絞った。福岡伸一の分子生物学『動的平衡』は、宇宙天文学者らにも支持されている(谷口義明『天文学者が解説する宮沢賢治「銀河鉄道の夜」と宇宙の旅』)。

福岡の人体内細胞(なぜ賢治は菜食主義者かバクテリア・アメーバも登場する

『ビジテリアン大祭』)のみならず、マクロ宇宙(四次元の『銀河鉄道の夜』)も同様に暗黒物質とエネルギーが合成分解を繰り返される。「エントロピー増大の法則」に似た子どもの熱放射に保育士は対峙して抵抗せずにはいられない。

石炭火力も止められない環境「後進国」だと非難したのは、地球温暖化による気候変動に危機感を抱いた世界の地質・環境学、天体・物理学、人類学、生物学等々の自然科学者たちだ。とくに地質学・人類学者らは、現在の地質年代「完新世」から資本主義人災の地球危機によって「人新世」(Anthropocene)へ変容を遂げているとアピールした。「資本世」だと揶揄もされた。

「ヒューマニズムから生命主義へ」パラダイムシフトを呼びかけた輩もいたが、そこには有機生命体を創り出した無機質への想いが寄せられていない。これではまだ生きものしか眼中にない終末論ではないのか、昼は子どもといっしょの学徒たちに、身近に迫った自然と生命の暗鬱に無頓着ではいけないだろうと問うてもみた。

天文・物理学、地質・鉱石学、生物学、農学に造詣の深い宮沢賢治がもし生きていたら、青い惑星の惨状にどう応えたら

うかと。真木悠介(見田宗介)なら、妹に寄り添い看取った(賢治の)「永訣の朝」の詩を詠い、身体細胞が消滅しようと宇宙自然界の循環止揚の連鎖はつづき、死もまた永遠の生だとでも言ったろうか。

宇宙地球人の自然生命体である子どもは、「保育所保育指針」にある「生命、自然及び社会の事象は豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培う」に合致し、「人類絶滅」の死生観の問いとあらば只事ではない。だが自然科学者の賢治は、そのことを隠さず作品に反映させた。

賢治は小中高の国語教科書に今も掲載されている。旧世代ならば、「雨ニモ負ケズ」を暗唱させられた記憶が強烈だろう。戦前世代なら戦士の士気高揚として、敗戦時には国難に耐へ忍ぶため、戦後は高度経済成長の担い手として、「雨ニモ負ケズ」は見事なまでに時流にマッチさせられた。世のため人のため東奔西走を惜しまない無垢な姿をこの詩は予見させるが、欲なき無常虚無のアナキスト賢治の冷めた詩行にも読めたらうに。そのような解釈を時代は決して許さなかった。

150編前後ある賢治童話は楽しく平易に読めそうだが、小学校の教科書に掲載されるような『やまなし』『雪渡り』を読んでも、先ず解釈の前提となる意味内容の把握が難しく、幼児向け作品には絶対無理だと学徒たちには一蹴された。幼児向けの提供はともかく、賢治から学べることは保育士には多々あることまででは否定されなかった。

とはいえ私の心中は穏やかではない。

あらゆるジャンルから照らされた賢治研究に関する論文数たるや、この20年でも500本はくだらない。異様な本数が寄せられる「賢治研究者」の関心対象は多様さを増し、次々と賢治像が塗りかえられていく。

賢治研究は自然科学者と人文・社会科学者の両面から光があてられるようになった。しかし圧倒するのは無名の賢治ファンで、自由な学究姿勢と異分野を凌駕する交流ほど尊いものはないと確信している。

近年は科学者としての宮沢賢治が見直され、自然科学の深い素養をもって童話を描いたという分析はゆるぎなく、その視軸は膨らみはじめた。賢治はアインシュタイン訪日の記事を読んでいるが、一般相対性理論のなんたるかを既に理解していた。

遠くの現象も近くにあるかのように「四次元」の時空間を織り成す作品として結実させた。『春と修羅』『銀河鉄道の夜』『農民芸術概論綱要』には「四次」を明示し、過去現在未来は区分できない同一瞬時なものとして幻想と幻影のリアリティーを示した。詩でもない『春と修羅』は解説不能と評されるが、わかりやすいと錯覚された童話も、その多くは未完草稿ゆえに、奥行きある批評が繰り返されてきた。

人気ベスト30位くらいに入りそうな作品に『虔十公園林』がある。よく読まれてきたとは言えない番外の短編に『車』と『バキチの仕事』がある。子どもか若者なのか年齢不詳の虔十、ハーシュ、バ

キチといった人間主人公が登場する。この三作品について学徒たちに感想を聞いてみると、動食物は脇役で目立たないし、星や宇宙らしき場面もない、ファンタスティックではない、つまり賢治らしくもない、お調子者が小気味よく表出した作品だとしか読み取れないのだ。

作品に通底しているのは、私は働く仕事だと思っていたので、青天の霹靂だった。たしかに『オツベルと象』にある労働酷使による悲惨と蜂起、理想的な産業(協同)組合をつくる『ポラーノの広場』とも違う。労働と仕事は遊びのようだし、遊びも労働、仕事みたいという感想域に達したのも少数である。

やんちゃで頑固な虔十の話は、結論だけならば黒沢映画の『生きる』に通じる。ハーシュは、なんとも能天気な暮らしぶりで気ままな遊動に浸って喜んでいる話だし、バキチは飽きっぽくて定職につけない転職ばかりを繰り返す、フーテンの寅に見えなくもない。

賢治作品の真贋を見たくとも見いだせず、貧困、放浪、ホームレスの三部作なのかといった見え方なのだ。しかも三人は知恵の少し足りない主人公だと、内心

は思いつつ言うことに憚る。今福龍太『宮沢賢治デクノボの叡知』の虔十批評は秀逸だが、学徒たちは『虔十公園林』を造ったことにのみ評価軸がある。そんな浅い勘違いの見方では能力・成果(できる)主義に汚染されている自分に気づいていないのと同じだと辛辣に批判してしまった。三人は理想の子ども大人像だと私は絶賛したいのに、素通り読解されて落胆したが、そこは大人同士の対話的熟議だ。

10次元の「超弦理論」を究めたいとハマル遊動師がいるように、保育労働学徒もまた『ホモ・ルーデンス』(遊動者)ぶりの仕事をするだろう。どこにだって、面白くて楽しい仕事はあるのだから。

かつて柄谷行人は『遊動論』において、協同組合の本質論を語るため民俗・民族学者の柳田、折口、熊楠、モース、スコットあたりまでを取り上げた。

今臨時国会に議論されよう労協法案の行間には、柄谷の著をも突き抜けた宇宙地球人として残された全人類史的レガシーが、賢治の語った遊動物者たちの苦楽と連帯の結晶として、秘められていることにも注目しておきたい。

若者が描く労働者協同組合・協同労働

10月26日から開会予定の臨時国会で、労働者協同組合法制定の現実味が帯びてきている。制定されると労働者協同組合ならびに協同労働の働き方が、多くの方に知れ渡り、社会的認知を広げる大きな機会となる。

そのような情勢で、未来をつくる若者が労働者協同組合・協同労働をどう描いているのかを深めることは、労働者協同組合の未来をつくる意味で大切なテーマであると考えている。それとともに協同を価値とする社会を実現するために、若者とどのように労働者協同組合・協同労働の取り組みを加速させていくのかを検討したい思いがあり、本号を編集した。

本号は3つの視点から特集を組んでいる。

第1は労働者協同組合・協同労働を「知る」視点である。寄附講座は「『協同』を価値とする社会づくりの主体者の育成」を目的に開講しているが、学生の働くことや人生と引き付けて労働者協同組合や協同労働がどのような意味を持つのかを考える機会となっている。本号では具体的実践として、千葉大学で開催した「地域で仕事をおこす-入門編・実践編」を紹介している。コロナ禍でオンライン講座として開催するなかで、学生の価値観（労働観・人間観・地域観）が劇的に変化した場面となった。具体的には「物事をお金や一人で考え完結する」視点から、「関係性・協同性・多様性・包摂性・挑戦（失敗が許される）・居場所」に着目することで、より広い視点を持つことができたことを学生の言葉で多く語られた。このような学びの背景には、多様な労働者協同組合・協同労働の実践ならびに学生同士、教員・学生の対話があり、講座で模擬的ではあるが「協同労働の雰囲気を作り出す」ことができたのではないかと考えている。

第2は、若者が労働者協同組合を「設立する」視点である。20代～30代6人で2020年2月に労働者協同組合を立ち上げた「北摂ワーカーズ」や、2020年12月に立ち上げ予定のジャーナリスト労働者協同組合「Unfiltered Coop」事務局で30代のEmi-doさんにご執筆いただいた。2つの団体の共通点として、生きづらさを抱える社会で、労働者協同組合とその働き方である協同労働が持つ「居場所・社会的包摂・オルタナティブ・連帯・団結・主体性・対話」等の性格に興味・関心を持ちながら、「自治・社会変革・民主主義」の理念で仲間が集まり、労働者協同組合を設立している点である。その意味で、労働者協同組